

月例研究会 (2014年4月23日)

丸岡秀子論

——産業組合中央会就職時期・退職時期の
確定など

松尾 純子

丸岡秀子に関する先行研究はあまり多くなく、代表的な研究に成澤むつ子『自立の開拓者 丸岡秀子—私の女性史学習ノート』(創風社, 1999年)がある。報告者は書評で本書の意義と課題を論じたが(『大原社会問題研究所雑誌』502号, 2000年), そのなかで丸岡の産業組合中央会への就職年及び退職年, 石井東一との再婚年, 北京への渡航年の確定が研究上の課題として残されていると指摘した。

本報告では, ①1929~30年:産業組合中央会就職時の言動の検討, ②1937年~39年:産業組合退職時期と渡航時期の確定を課題とし, その結果と確定作業によって発見した資料の紹介を行なった。

①については, 成澤前掲書は丸岡の記述のあいまいさから1929年か30年の春か夏としているが, 「勤務すること九年」(『日本農村婦人問題』1937年), 「一九二九年の夏」に至る経緯説明(『声は無けれど』岩波書店, 1987年), 「二, 三カ月こうしている間に」「働くことである」という「信念」が固まった(『ひとつの真実に生きて』東洋書館, 1952年)との説明から, 1929年とし, 子どもが一歳を過ぎたことを契機として再就職に踏み切ったと考え, 「一年間, 喪に服した翌年の春」(『田村俊子とわたし』(増補版), ドメス出版, 1977年)などの「一年」は, 生後一年から来るデフォルメと推測する。「私の体験的確信は, 少なくとも離乳

期までの一年やそこいらは, 子どものそばにいて, スキンシップを怠ってはならないということ」(『風に向かって生きた女たち』日本経済評論社, 1993年)を傍証として挙げた。ただし, 1939年に丸岡は『読売新聞』に「寡婦の為に考えて下さい」(8月8日付)と「母性擁護運動を起せ」(12月14日付)の「公開状」を寄稿しており, それらの記事掲載と再就職の関係など, なお調査を必要とする。

②について, 丸岡秀子写真集編集委員会編『ひとすじの道を生きる—写真集 丸岡秀子の仕事』(ドメス出版, 2000年)の略年譜では1937年に退職, 北京渡航とされているが, 丸岡は39年の「一月元日に」「南京からの年賀状」を読み, 「辞表を書い」たと記している(『田村俊子とわたし』)。『婦女新聞』(復刻版, 不二出版)では1939年7月14日開催の婦人時局研究会で農村婦人問題につき報告(7月16日付)との記事以降, 研究会等の記事に丸岡の名はなく, 成澤が紹介した北京からの寄稿「胡同の声を」(12月3日付)へと続く。「近頃余り姿を見せない」丸岡が「来月早々北京に行く」と報じる記事もあることから(「夫君を追って大陸へ」『読売』7月21日付), 1939年1月に辞表を提出し, 8月に渡航したと言いうる。北京からの寄稿文は9月末か10月初めに書かれたと考えれば内容上にも矛盾はない。なお, 丸岡は1934年に指導部教育係書記, 36年に調査部資料係主事補, 38年に事業部事業第四課主事補であった(産業組合中央会『役員名簿』昭和九, 十一, 十三年, 法政大学大原社会問題研究所蔵)。

報告後は, 公開状の書き方の特徴や内容上の意義について指摘があり, 時期の確定が丸岡研究上を持つ意味などの質疑応答があった。

(まつお・じゅんこ 法政大学大原社会問題研究所
兼任研究員)